



2012年1月11日放送

漢方頻用処方解説 当帰四逆加呉茱萸生姜湯

日本大学 統合和漢医薬学分野 矢久保 修嗣

当帰四逆加呉茱萸生姜湯は、『傷寒論』の厥陰病篇に記載されています。

原典では、患者が手足に強い冷えを訴え、脈が細く触れにくい者は当帰四逆湯の適応である。さらに腹部に長く冷えが停滞しているのであれば、当帰四逆加呉茱萸生姜湯を使うのがよい、と記載されています。そして当帰四逆加呉茱萸生姜湯は、酒を半分加えた水で煎じ、温めたものを5回に分け、内服するという方法も紹介されています。ですから、当帰四逆加呉茱萸生姜湯の煎じ薬では、煎じたあとに酒を加えて服用することを推奨している医師もいます。

私は、エキス剤を内服している方には、熱い湯で溶かして飲むように指導しています。溶けない沈殿物があれば、それもしっかり飲むように。また、酒とは相性がよいですよ、ともお話しています。

当帰四逆加呉茱萸生姜湯は、9種類の生薬により構成されています。当帰、桂皮、芍薬、木通、細辛、甘草、大棗、呉茱萸、生姜です。これを生薬の薬能からみると、当帰、芍薬は血の巡りを良くし、補血・調経、鎮痛・鎮痙作用があり、体を温め、月経痛などを改善します。細辛、木通、桂皮も体を温めます。大棗、生姜、甘草は胃腸機能を高め、精神を安定させ、鎮痛効果もみられます。呉茱萸は血行を良くして手足の冷えを温め、それに加えて鎮痛、制吐作用もあります。

江戸時代の有持桂里（1758-1835）は、『校正方輿輓』で次のように述べています。

「当帰四逆加呉茱萸生姜湯は、慢性的な冷えが原因で月経が通じなくなったものに良い。

女性で身体内部に慢性的な冷えがあり、腰や腹部の冷えや痛みが陰部に放散し、脈が細く沈んでいるものに必ずといってよいほどよく効く。身体内部に慢性的な冷えがあれば、男性では腹部のしこりや硬結、女性ではおりものがある。このような状態で臍の下が冷えて痛み、腰から股にかけて痛みが響くようなものに、当帰四逆加呉茱萸生姜湯がたいへんよく効く。下痢が長く続き、脈が細く沈んでいれば、この処方を用いるとよい。また冷えによる腹痛に用いるとよい。」と記載しています。

和久田叔虎（よしとら）は『腹証奇覽翼』（1809）で、当帰四逆加呉茱萸生姜湯の腹証に關して、「腹筋が棒状に緊張する腹直筋攣急の所見は、桂枝加芍薬湯あるいは当帰芍薬散、当帰建中湯の証に似ている。」と記載しています。

当帰四逆加呉茱萸生姜湯の使用目標をお話します。手足の冷え、しもやけ、そして疝（せん）といわれる独特の腹痛です。まず、体質的に手足が冷えやすい人です。冷えによって増悪する各種症状がある時に用います。しもやけ、下腹部痛、月経痛、頭痛、腰痛、下肢痛などがよい目標です。本方剤の冷えは、原典では「手足寒厥（かんけつ）」と記載してあります。自覚的に冷えをひどく感じるものです。寒冷によって手足の血行が障害されている状態です。この時の腹診所見では、橈骨動脈の拍動は細くて触れにくい所見となります。寒冷による血行障害であるしもやけ、凍傷にも有効です。凍傷を治すばかりでなく、予防の効果もあります。凍傷のできる前より内服すると効果的です。また凍傷ができて始めても、早期に飲めば悪化させない効果があります。これは局所が冷たい時によく効きます。

次は腹痛です。慢性に経過する下腹部痛です。痛みは寒冷によって増悪します。下腹部から上に突き上げるようになり、腰痛、背部痛、頭痛を伴うものもあります。過去に下腹部の手術、特に婦人科の手術や産科的処置、流産の既往が多くみられます。疼痛の性状はつれる、突っ張るという状態が多く、痛む箇所は1ヵ所ではなく、あちこちで痛む傾向があります。その時の腹部所見は、全体にガスが多く、腹筋が薄く緊張が弱い場合や、あるいは腹直筋が棒状に突っ張っている場合があります。臍傍の圧痛など瘀血の所見がみられ、下腹部が冷たく感じられることがあります。

当帰四逆加呉茱萸生姜湯を使用する応用として、坐骨神経痛、腰痛、神経痛などにも用いられています。過敏性腸症候群、月経異常や不妊症などの婦人科疾患にも用いられます。またレイノー病に有効という報告もあります。

当帰四逆加呉茱萸生姜湯と鑑別すべきものとして、当帰建中湯、当帰芍薬散、呉茱萸湯があります。当帰建中湯は手足の冷え、下腹部痛などでは本方剤との鑑別が必要です。腹部は軟弱で両側の腹直筋の緊張も類似しています。当帰建中湯に比べ、本方剤は冷えの症状の著しく強いものに用います。

当帰芍薬散は手足の冷え、下腹部痛、頭痛などの症状では本方剤との鑑別が必要になります。当帰芍薬散は血虚や水毒があるため、肌の色が白い、肌がつやつやとしている、むくみやすい、めまいなどの症状がみられます。腹部には振水音の所見がみられます。

最後に呉茱萸湯です。頭痛、冷えがみられるところが本方剤と鑑別が必要です。呉茱萸湯は頭痛と嘔気、嘔吐が使用目標です。呉茱萸湯の頭痛は拍動性の片頭痛などもあります。

本方剤の頭痛は冷えにより誘発されたり、増悪する傾向があります。

ここで症例を紹介します。症例は19歳の女性です。主訴は手足の冷えです。現病歴では、小学生時代から手足が冷え、冬にはしもやけができやすい状態がありました。冬は使い捨てカイロが手放せない状況でした。いつも夜は靴下をはいて寝ていました。夏でもエアコンは使用しません。エアコンの風が体に当たると冷えが出現し、頭痛やキリキリとした腹痛を訴えました。既往歴、家族歴に特記すべきことはありませんが、母親は冷え症でした。

身体所見は身長158cm、体重51kg、血圧98/58mmHg、やや痩せ。眼球結膜、眼瞼結膜に異常を認めず。胸部、腹部には一般的な異常は認めませんでした。下腿浮腫もみられません。

漢方医学的所見としては、顔色はどす黒く、目の周りにクマができやすい。疲れやすく、風邪をひきやすい。胃腸は弱い。食事の摂取量は少なく、食が細い。手足は実際に冷たく触れます。口の渇きはありません。温かいものを摂ることを好みます。小児期からアイスクリームは嫌いです。生理痛があります。舌は薄いピンク色です。腫大はありません。舌苔は白、うすいものでした。舌静脈の怒張が軽度みられます。脈は沈んでいて、弱く小さい脈でした。腹部では、腹部は軟弱、軽い腹直筋の緊張、軽い臍傍の圧痛を認めました。振水音はみられませんでした。軽い瘀血の所見はありますが、水毒の所見はみられません。当帰芍薬散の適応ではないと考えられます。また著しい冷えがあることより、当帰建中湯より当帰四逆加呉茱萸生姜湯が適切と考えられました。

当帰四逆加呉茱萸生姜湯エキス剤を7.5g/日分3で投与を開始しました。これを内服して、2時間もすると手足の温まる感覚がありました。2週間後には、腹部が温まり手足も温かくなってきました。このような経過を辿り、現在も内服を続けています。

冷え症に対する当帰四逆加呉茱萸生姜湯の検討を紹介します。

末梢循環障害30例を対象として、本方剤を投与した検討があります。効果発現までの平均期間は、手足のしびれは2.5週、手足の冷えは1.5週でした。全般改善率は57%、有効率は53%でした。小児のしもやけ61例に対する予防的効果の検討があります。酢酸トコフェロール投与群では有効率54.2%で、一方、本方剤投与群では94.2%の有効率で、重症例においても改善率が高かったというものです。

10人の健常ボランティアを対象に、本方剤のエキス剤2.5g内服後の深部体温を検討しています。内服20分後より深部体温の上昇が認められ、90分まで直線的増加を示し、6時間まで持続し、平均上昇温度は2.5℃であり、カテコールアミン系の合成、代謝の亢進も伴っていました。本方剤について、以上のような報告があります。

本方剤は手足の冷えを感じ、冷えると下腹部が痛くなるものや、しもやけ、頭痛、腰痛など、寒冷によって引き起こされる疼痛や不定愁訴に用いられる重要な処方です。今日は当帰四逆加呉茱萸生姜湯を紹介しました。先生方の日常診療の参考にしていただければ幸いです。